

地域情報（県別）

【沖縄】父は小児保健の功労者「一緒に働きたい」と小児科医に-宮城大雅・ゆくいこども診療所 所長に聞く◆Vol.1

重心の子を支えるボランティア活動で小児在宅にも興味

2025年6月18日 (水)配信 m3.com地域版

沖縄県では初となる医師回診型の小児科クリニック「ゆくいこども診療所」が2025年4月、南城市に開院した。「どんな子どもでも受診しやすいクリニックをつくりたい」。宮城大雅所長が重症心身障害児や自閉症などの子どもの利便性を考えて環境やシステムを工夫。その思いの端緒はこれらの子と触れ合っていた子ども時代にあった。沖縄の小児保健の功労者である父に憧れて小児科医を志した経緯、大学卒業後のキャリアを聞いた。（2025年5月15日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



宮城大雅氏（本人提供）

父は沖縄県小児保健協会会長、天皇陛下から賞状も

——資料によると、宮城先生は1984年に沖縄市で生まれ、2011年に琉球大学医学部を卒業しています。まずは、医師を志した経緯をお聞かせください。

「父と一緒に働きたい」——。小さな頃からそう思い続けていたことが一番の理由です。私の父（宮城雅也）は新生児科を専門とする小児科医であり、40代からは重症心身障害児（以下、重心）の支援活動も行っていました。その代表的な活動が、1993年に父が立ち上げたボランティア団体「ていんさぐの会」（那覇市）です。この会では、在宅医療を必要とする子どもたちを支えようと、医療機器の無料貸し出しやサマーキャンプ、ボランティアの養成などを行っており、人工呼吸療法が診療報酬の対象でない頃、重心の子を自宅に帰すために募金活動も行っていました。

父は多忙でほとんど家におらず、仕事を家庭に持ち込まない人でしたが、その活動は新聞などのメディアでよく紹介されていました。記事を通して父がやっていることとその思いを知り、「お父さんはすごいことをしてるんだ」と子どもながらに感動したことを覚えています。それに、私自身も幼少期から重心の子たちと触れ合っていました。父が多忙ゆえにていんさぐの会に私も連れて行き、一緒に遊ばせていたんですね。やがて私はこの会にボランティアと

して参加するようになりました。ていんさぐの会では重心の子とその家族20～30組ほどを招いてピクニックや2泊3日のサマーキャンプを多職種で行っていました。その中で、さまざまな当事者や地域の支援者と知り合い、彼ら彼女らの声を聞いていたことが、医師としての今につながっています。

——先生の語り口から、お父さまへの尊敬の眼差しが伝わってきます。

理想に向かって愚直に進むタイプ、と言えばよいでしょうか。父は子どもたちのために何ができるかを常に真剣に考え、活動する人でした。私が高校生、大学生になっても沖縄の小児保健分野で活躍を続け、過去には天皇陛下から賞状を手渡されたこともあります。現在は沖縄県小児保健協会の会長を務めています。70歳になってなお「若ければもっといろんなことができたのに」と話すほど（笑）。現在、ていんさぐの会で父は事務局長として、私は医療担当の役員として一緒に活動しています。私は2025年内に副会長に就任する予定です。

北海道の小児在宅先端施設で人工呼吸療法を学ぶ

——先生は2025年にゆくいこども診療所の所長に就任するまで、どのようにキャリアを重ねてきたのですか。

沖縄の離島や北海道をフィールドに、小児等在宅医療（以下、小児在宅）を含めて診療してきました。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期・後期研修を受けた後、必修だった2年間の離島研修として沖縄県立宮古病院の小児科に勤務し、こちらで小児科専門医を取得しました。

北海道で診療したのはその後です。同センターの研修制度に外部で学んでよいプランがあり、当時から関心のあった小児在宅を勉強したいと院長に相談したところ、東京の先生を紹介され、さらにその方から「北海道に面白い先生がいるよ」と教わりました。その「先生」とは、医療法人稲生会の土畠智幸理事長です。土畠先生は自宅で人工呼吸器などの医療を必要とする人への訪問診療や訪問介護、居宅介護、短期入所施設の運営など多岐にわたって事業を展開しています（『【北海道】白衣を着ない医師の活動は、社会変革の一大チャレンジ-土畠智幸・稲生会理事長に聞く◆Vol.1』を参照）。稲生会が運営する「生涯医療クリニックさっぽろ」で1カ月間研修を受けたところ、小児在宅で最先端を行っていることに感銘を受け、「引き続きここで勉強させてほしい」と志願しました。

同院は当時、180～200人ほどの在宅患者を診療しており、その約9割が人工呼吸器を使っていました。こちらでは2年、勤務しました。

——先生が小児在宅に関心があったのは、ていんさぐの会での活動が影響しているのでしょうか。

そうですね。ていんさぐの会で子どもたちと一緒に過ごしていたことが大きく、親御さんの言葉にも影響を受けました。「このイベントでしか休める時がないよ……」。重心の子を育てている当事者の声からは日頃の苦勞が想像され、「沖縄なのに海に入る暇もない」と飲み会で冗談を交えて語る人もいました。当時は「在宅」の言葉もない時代です。私は子どもながらに、「こんな人たちをサポートできる制度があるといいのにな」と感じていました。

小児在宅を専門的に学びたいと思った直接のきっかけは、県立宮古病院時代にあります。私はある難病の子の主治医を務めていたのですが、その子が末期になったときに家にうまく帰せなかったのです。自分なりに一生懸命だったのですが、人工呼吸器の管理ができなかったため、子どもが家で過ごせたのはわずか1時間でした。病院に戻って亡くなった子とご家族の姿を見たとき、自分の技術が足りないことを痛感しました。「こんな子と家族がもっと安らげる、充実した世界をつくりたい」。そう、前を向きました。

◆宮城 大雅（みやぎ・ともつね）氏

2011年琉球大学医学部卒。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターでの初期・後期研修修了後、離島研修として沖縄県立宮古病院小児科に在籍。「生涯医療クリニックさっぽろ」と「ゆずりは訪問診療所」で小児等在宅医療を行い、医療型障害児入所施設「沖縄南部療育医療センター」で療育を学ぶ。2025年4月から「ゆくいこども診療所」所長。

